『古今集遠鏡』における敬譲の助動詞

――(サ)セラルル・(ラ)ルル・(サッ)シヤルの使用差をめぐって――

塩澤和子

1　はじめに

『古今集遠鏡』(以下『遠鏡』と略す)は、「はし」に「此書は、古今集の哥どもを、ことぐくいまの世の俗語に譯せる也」とあるように、『古今和歌集』を俗語訳したものである。宣長が門弟の一人、尾張藩の重臣横井千秋の求めに応じてまとめ、寛政九年刊行、宣長六八歳の時の著作物である。全体の構成は遠鏡一から六までの六部構成をとり、細部に関しては次のようになっている。

遠鏡一　はし　仮名序　巻第一～巻第二
遠鏡二　巻第三～巻第六
遠鏡三　巻第七～巻第十
遠鏡四　巻第十一～巻第十三
遠鏡五　巻第十四～巻第十六
遠鏡六　巻第十七～巻第二十

「はし」を見ると、宣長が『遠鏡』を上梓した理由、俗語採択の基本姿勢、俗語観、訳出法等に関する記述が

あるが、俗語訳の基底となるべき江戸中期の口語（俗語）については、次のように述べている

1　大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざ也、ただし京のにも、えりすつべきは有て、なべてはとりがたし、

2　あまりいやしき、又たはれすぎたる、又時々のいまめきことばなどは、はぶくべし、

3　哥はことに思ふ情のあるやうのまゝに、ながめ出たる物なれば、そのうちとけたる詞して譯すべき也、うちとけたるは、心のまゝにいひ出たる物にて、みやびごとのいきほひに、いますこしよくあたればぞかし、

4　男のより、をうなの詞は、ことにうちとけたることの多くて、心に思ふすぢの、ふとあらはなるものなれば、哥のいきほひに、よくかなへることおほかれば、をうなめきたるをも、つかふべきなり、

5　いはゆるかたことをも用ふべし、

（原文中には右の箇条書きに示す数字は使っていないが、ここでは五項目にまとめた。）

これによれば、採用する資格のある俗言は「京わたりの詞」「うちとけたる詞」「をうなの詞」であり、資格のないのは「いやしき」「たはれすぎたる」「時々のいまめきことば」となる。「かたこと」に関しては次のように、たとへばおのがことを、うるはしくはわたくしといふを、はぶきてつねに、ワタシともワシともいひ、ワシハといふべきを、ワシヤ、それはをソレヤ、すればをスレヤといふたぐひ、又そのやうなこのやうなを、ソンナコンナといひ、ならばたらばを、ばをはぶきて、ナラタラ、さうしてをソシテ、よからうをヨカロ、とやうにいふたぐひ、

など、省略形、融合形の例を挙げている。

このような方針で採択された俗語ではあるが、本稿ではこのうち敬譲の助動詞を取り上げて考察していきたいと考える。

まず『遠鏡』に現れる敬譲助動詞であるが、既に拙稿（注1）で取り上げたが、本稿での考察の必要上その概

略を述べておく。『遠鏡』に現れる敬譲助動詞（尊敬、丁寧）には、次の4種がある。

(1)　せらるる
(2)　らるる
(3)　さっしやる・しやる（っしやる）
(4)　ます（る）

ここに列挙した助動詞は、文語の「（せ）らるる」「（ら）るる」、近世語特有の「さっしやる・しやる（っしやる）」、そして現代共通語に通じる丁寧の助動詞「まする」となっており、現代語から見ると、種類は豊富であるという印象をもつ。しかしこれらを近世語全体の敬譲の助動詞の中に位置付けてみると、その種類は極端に制限されたものとなっていることが分かる。

近世語の有する敬譲の助動詞は、江戸期における身分・階級による差、年齢・性の差を反映してその種類が豊富であり、複雑な様相を呈している。文芸作品には多様な敬譲の助動詞、たとえば「さしやる(さっしやる)、しやる、やしやる（やっしやる）、さしやんす、しやんす、やしやんす」などが認められ、それらは対象によって表現形式が使い分けられ、封建社会における対人関係の複雑さを浮き彫りにしているともいえる。これに比べると、『遠鏡』では近世語特有のものは「さっしやる・しやる（っしやる）」だけであり、種類は決して多いとは言えない。

それに、尊敬を示す(1)(2)(3)の使用頻度については、

(1)　せらるる　　5例
(2)　らるる　　24例
(3)　さっしやる・しやる（っしやる）　38例

という結果であり、数量的に見ても敬譲の助動詞の数は多くはない。

もっとも使用頻度が低いのは、『古今集』本文における和歌自体に関係することも考えられる。森野宗明氏が

和歌における敬語表現に関して「平安時代以降の和歌では敬語表現は、あまりみられないのであるが、特に『る』『らる』の例は少ない。」（参考文献⑥40ページ、以下参⑥40ペと記す）と指摘されるように、本文自体の敬語表現の少なさに関係しているのかもしれない。しかし『遠鏡』を見ると、『古今集』本文では敬語表現をとっていない箇所に、たとえば「シャル・サッシャル」を当て、「おきていなば　起テイナシャッタナラ」「あふとはすれど逢ッシャリハスレドモ」等と、敬語表現に整えて俗語訳していることも事実である。このことから考えると、敬譲の助動詞の使用頻度の低さは、本文とは関係なく別の理由があるようにも思う。この点に関しては稿を改めて考察したいと思う。

さて以上のような種類と使用頻度の敬譲の助動詞であるが、本稿では、「尊敬」（動作の主体に対する話し手の敬意表現）を表す（サ）セラルル、（ラ）ルル、（サッ）シャルの3種を取り上げ、それらの使用場面と使用上の差異、近世語における位置等に関して考察することにしたい。資料は参考文献①に挙げたものを使用する。考察の対象は、遠鏡一から遠鏡六までの、和歌、地の文、本文に付してあるルビ、すべてである。

2　（サ）セラルル

（サ）セラルルは室町時代に敬譲の助動詞（ラ）ルルが使役の助動詞（サ）スと結合して成立したもので、最高敬語として広く口頭語で使われるようになったものである（参⑪116ペ）。ちなみにこれは江戸期になると、形態変化によって（サッ）シャルを派生させ、江戸期特有の助動詞として多用されるようになる。

（サ）セラルルは『遠鏡』にわずか5例だけ認められる。敬意の対象は、例文①の天照大神（以下例文のナンバーのみ挙げる）、②③すへらぎ、④法皇、⑤故藤原としもとの朝臣である。次に例を示す。

①　　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神代の事もおもひ出らめ

…此大原野ノ御神モ　カノ神代ニ天照大神ノ此神ヘ勅定ノアラセラレタ御事モ　今日コソ思召シ出サレテ御満

足ニ思召スデゴザラウ（391上）

②　かゝるにいますへらぎのあめのしたしろしめすことよつのときこゝのかへりになむなりぬる

○サテ右ノ通リデアツタトコロニ　御当代上様ノ天下ヲ治メサセラルゝノモ　今年デ九年ニサナルガ（254下）

③　よろづのまつりごとをきこしめすいとまもろ〳〵の事をすてたまはぬあまりに

○イロ〳〵ノ御政事ヲトリ行ハセラルゝ御ヒマ〳〵ニ　其外ノ一切ノ事マデヲ御ステアソバサレヌアマリニ（255上）

④　中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじめてあそびける日法皇御らんじにおはしましたりけり

伊勢

水のうへにうかへる船の君ならばこゝぞとまりといはまし物を

○君ガ　水ノ上ニウイテアル船デアラセラレウナラ　コヽガ船ノ泊リマス所デサ　ゴザリマスト申シ上ケテコヨヒハ御留メ申シマセウモノヲ（398上）

⑤　ふぢはらのとしもとの朝臣の右近ノ中將にてすみ侍けるざうしの身まかりて後人もすまずなりにけるに（略）

みはるのありすけ

君がうゑし一むらすゝき虫の音のしげき野べともなりにけるかな

○君ノウエテオカセラレタ　タツタ一ムラノ薄ガ　シゲウナツテ虫ノシゲウナク野ニマアナツタワイ（387上）

①は御息所（二條后）が先祖を祭る大原野神社に参詣された日に業平が詠んだ歌で、神代の事に関係のある天照大神を俗語訳に登場させ、その神に対し「天照大神ノ此神ヘ勅定ノアラセラレタ御事モ」と、セラルルを用いている。

②③は、仮名序で「古今和歌集勅撰縁起に相当」（参⑬上202ページ）する箇所であり、天皇が政務に就かれてから

九年になり、御恩恵が全国普く行き亘っていると誉めたたえた後、政務ばかりでなく勅撰集に対しても関心を示されている、と述べたところである。②③とも「すへらぎ」に対し「御当代上様ノ天下ヲ治メサセラルヽノモ」「御政事ヲトリ行ハセラル、御ヒマ〳〵ニ」と、セラルルを使っている。

④は宇多法皇を船に見立てて伊勢の詠んだ歌であるが、「君ガ水ノ上ニウイテアル船デアラセラレウナラ」と、法皇に対して敬意を表している。なお④は、セラルルの未然形に推量の助動詞ウが接する形をとっている。この助動詞ウの接続法に関しては、近世前期上方語では下一段活用には「う」が接するが、後期江戸言葉では「よう」と「う」の接する形がある。ただし後期で「う」の接する場合、「半ば頃からは特に古風に（または上方風に）いう場合の外、あまり用いられなくなった。」（参②372ページ）とある。『遠鏡』の成立が江戸中期であることを考えれば、『遠鏡』には江戸言葉からみれば古風となる、上方風の用法が生きていることが分かる。

⑤は藤原利基の朝臣（右近中将）が生前住んでいた曹司が荒れ放題になっているのを見、心動かされて詠んだ歌である。『遠鏡』では故人に対してはラルルを使う傾向が強いが、この⑤は天皇以外の、いわば臣下の身分の者に対してサセラルルを使った唯一の例となっている。ちなみに藤原利基の朝臣については「『右近中将利基、内大臣高藤公兄、中納言兼輔父也』（余材抄）。兼輔は貫之たちとも親交があった」（参⑬下611ページ）とある。

このように俗語訳では（サ）セラルルを最高の敬意を示す対象（⑤は疑問だが）に対して用い、最高敬語としての位置を保持している。

3　（ラ）ルル

（ラ）ルルは、未然形（（ラ）レ）、連用形（（ラ）レ）、終止・連体形（（ラ）ルル）の4種の活用形が使われている。（ラ）ルルの活用に関しては、近世前期上方語では（ラ）ルル（下二段活用）の方が多く、近世後期江戸言葉になると（ラ）レル（下一段活用）が勢力を増し、二段活用の例がきわめて少なくなるとの指摘がある（参⑪118・119ページ）。『遠鏡』には下一段活用の例はなく、終止形・連体形は（ラ）ルルの形をとっており、下二段活用が勢力を

ふるっている。(ラ)ルルの使用頻度は、24例である。(ラ)ルルの用法に関して森野宗明氏の二分類を参考に（参⑥36ページ）、

(1)　敬語動詞に下接する用法

(2)　一般動詞（補助動詞）に下接する用法

の二つに分け、敬意の対象との関係を検討していくことにする。

(1)　敬語動詞に下接する用法

(ラ)ルルは敬語動詞「思召ス」「御……アソバス」「仰付ケル」「ツカハス」に下接し、「思召シ出サレテ」「ツカハサレタ時ニ」「仰付ラレタ」「御ヨマセアソバサレタ」として現れる。9例ある。敬意の対象は、「大原野ノ神、天皇、二條后、法皇」の四者である。このうち天皇（俗語訳では天子様、御当代上様）に対し「仰付ラレタ」を使っているのが4例ある。次に例を示す。

⑥　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神代の事もおもひ出らめ

○カヤウニ御子孫ノ藤原氏ノ御息所ノ東宮ノ御母儀トシテ御参詣ノアルナレバ　此大原野ノ御神モ　カノ神代ニ天照大神ノ此神ヘ勅定ノアラセラレタ御事モ　今日コソ思召シ出サレテ御満足ニ思召スデゴザラウ（391上）

⑦　かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりける時に（略）

コレハ葛城ノ王ト云ヲ御用デ奥州ヘツカハサレタ時ニ（247上）

⑧　いにしへのよゝのみかど春の花のあした　秋の月の夜ごとにさふらふ人々をめしてことにつけつゝ哥をたてまつらしめ給ふ

○昔ハ御代々ノ天子様ガ　春ノ花ノ時分ヤ　秋ノ月夜ナド云時ニハ　イツデモ　ツメテ居サツシヤル衆ヲ御前ヘメシテ　ナンゾレカゾレ事ニツケテハ　哥ヲ上ルヤウニ仰付ラレタ（250上）

⑨ よろづのまつりごとをきこしめすいとまもろ〳〵の事をすてたまはぬあまりに
○イロ〳〵ノ御政事ヲトリ行ハセラルゝ御ヒマ〳〵ニ　其外ノ一切ノ事マデヲ御ステアソバサレヌアマリニ
（255上）

⑩ ある人のいはく　さきのおほきおほいまうちきみの歌也　二條后のとう宮のみやすむ所（御母儀様）ときこえける時（申シタ）正月三日（康秀ヲ）おまへにめしておほせごとあるあひだに日はてりながら雪の（康秀ガ）かしらにふりかゝりけるをよませ給ひける（オヨマセアソバサレタ）（258上）

⑪ 法皇西川に（へ）おはしましたりける日（御出アソバサレタ日）つるすにたてりといふことを題にてよませ給ひける（オヨマセアソバサレタ）（397下）

⑥は、例文①と同じ文脈中での使用であるが、ここでは天照大神から神勅を受けた大原野ノ御神に対して「今日コソ思召シ出サレテ御満足ニ思召スデゴザラウ」と、「思召シ出ス」にルルを下接して敬意を表している。⑦から⑨は仮名序の記述であり、いずれも天皇を敬意の対象として「ツカハサレタ時」「仰付ラレタ」「御ステアソバサレヌ」と用いている。ただし⑦は敬意の対象が文脈中に現れず、特定することが出来ないため、「公の政治的動作に関して用いられ」（参⑪107ページ）たと見る方が妥当かも知れない。⑩、⑪は和歌の詞書の一部に漢字カタカナでルビを付したもの（本稿では（　）で示す）である。このうち⑩は二條后に対し「よませ給ひける（オヨマセアソバサレタ）」と使い、⑪は法皇に対し「おはしましたりける日（御出アソバサレタ日）」「よませ給ひける（オヨマセアソバサレタ）」と使っている。二條后、法皇とも敬意表現は「オ……アソバサレタ」である。

以上、例示した（ラ）ルルは「すでに敬意を有する敬語動詞に接して、その敬意の度合いを増強する用法」（参⑥36ページ）であり、敬意の対象は神または最上位の身分の者に限られている。

(2)　一般動詞（補助動詞）に下接する用法

（ラ）ルルが一般動詞（補助動詞）に下接する場合、敬意の対象となるのは、一般の人物（天皇、法皇、二條后

を除く）である。この中には、生存者と物故者との双方を含んでいるため、考察に当たっては便宜的に、(a)生存者、(b)物故者、と二種に分けて検討することにする。

(a)　生存者

ここには、葛城ノ王、僧正遍昭、恋人、この歌の読者、公の政治的動作がある。恋人には夫婦の間柄も含め、敬意の対象として「相手の男」または「相手の女」の両方を一括する。次に例を示す。

⑫　かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりける時に国のつかさことおろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさましがりければ（略）

○コレハ葛城ノ王ト云ヲ御用デ奥州ヘツカハサレタ時ニ　国ノ守ナドガ御馳走申シタケレドモアシラヒガ麁末ナトテ　葛城ノ王ガキツウブケウニ思ハレタ時ニ（247上）

⑬　僧正遍昭によみておくりける　　これたかのみこ

桜花ちらばちらなむちらずとて故郷人の来ても見なくに

○遍昭帥ガ大方此花ヲ見ニ来テクレラルゝデアラウト思フテ毎日毎日マテドモ見エヌ　ケフマデ見エヌカラハ　モウ大方見エヌノデアラウ（267上）

⑭　近院ノ右のおほいまうち君

かへし

今はとてかへすことのはひろひおきておのが物から形見とやみむ

○モウハト云テカヘシテオコサレタ此文ヲ　ヒロウテトツテオイテ　モト自分ノ物ナガラモ　ソナタノ形見ヂヤト思ウテ見マセウカイ（367上）

⑮　うきめのみおひてながるゝ浦なればかりにのみこそあまはよるらめ

○ナニヽツケテモウイコトバツカリデ泣テクラスワシナレバ　思フ人ノタマ〳〵ニミエルノモ　タヾカリソメニ口フサゲニチヨツト立ヨラルゝバカリノコトデコソアラウケレ（370下）

⑯　なりひらの朝臣

かへし

ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり

○ワシヲ雨雲ニタトヘラレタガ　ナルホドヨイタトヘヂヤ　其雲ノヤウニ　ワシガ　イタリキタリバツカリシテ足ヲトメズニタテルノハ（374下）

⑰ わがせこをみやこにやりて塩がまのまがきの鳴のまつぞ恋しき

コチノ人ヲ京ヘヤツテ　留守ヂウ　イツモドラルヽコトヤラト（三四）待テ居レバサテモ戀シイ（425上）

⑱ ふるのいまみち

しりにけむきゝてもいとへよの中は浪のさわぎに風ぞしくめる

○コレ世間ノ衆　知テ居ラルヽデモアラウガ　モシ知ラシヤラズバ　今ワシガ云テキカスヲ　聞テナリトモ此世ヲバ早ウステサツシヤレ（402上）

⑲ これよりさきの哥をあつめてなむ萬えうしうとなづけられたりける

○サテ此奈良ノ御時代マデノ哥ドモヲ集メテ萬葉集トサ　題号ヲツケラレタワイ（252下）

⑫は例文⑦と同一文脈中に現れる記述で、ここでは葛城ノ王に対し「キツウブケウニ思ハレタ時」と、ルルによる敬意表現を使っている。葛城ノ王に対しては天皇や法皇に対するような最高の敬意を表してはいない。

⑬は「これたかのみこ」が僧正遍昭に対し「花ヲ見ニ来テクレラルヽデアラウト思フテ」と、僧正の「花を見に来る」という動作に敬意を表す表現をとっている。ここにある補助動詞テクルルは、上方語では「特定の者に、好意を以てその動作をなす意を添えるに用いる。」（参⑦158ページ）という。また江戸言葉では『くださる』『くれる』は、他人のする動作を、自分のためになるものとして言い表わすに用いる。すなわち他人が自分のためにその動作をする意味を表わす。そのうち『くださる』は、その動作を……強く言い表わす敬語であるが、『くれる』は意味がさほど強くない平常語である。」（参②199ページ）とある。以上から考えると、俗語訳でのテクレラルルの使用は僧正遍昭に対する特別高い敬意の表出というのではなく、平常語にラルルを下接させた、軽い敬意の

表れであると解せる。

⑭から⑰は恋人に対して（ラ）ルルを用いた例である。⑭は近院ノ右のおほいまうち君が以前送った文に対し、典侍藤原ノよるかの朝臣が「我身ふるればおきどころなし」と詠んで返してきたため、それに対する返歌で「カヘシテオコサレタ此文ヲ」と、よるかの行為に対し敬意表現をとっている。⑮は「あま」を恋人に見立てて、「チヨツト立ヨラル、バカリノコトデ」と、相手の男に対する敬意表現。⑯は「相手の女が『天雲』と業平をたとえたので早速それを承けて自分を天雲に寄せて答えた」（参⑬503ページ）贈答歌で、「ワシヲ雨雲ニタトヘラレタガ」と相手の女に対する敬意表現。⑰は「東歌みちのくうた」で、妻がわがせこ（コチノ人）に対して「イツモドラル、コトヤラ」と敬意を表す例である。これら敬意の対象となる恋人を見ると、特別気を遣うべき相手とはいえず、むしろ親しい間柄という印象が強い。従ってここでの（ラ）ルルは、相手に対する軽い敬意の表れと解することが出来る。

なお相手の男性に対しては「思フ人」「コチノ人」という訳が当ててあるが、女性に対しては「ソナタ」を使っている。

⑱は「この歌の読者に言いかけている」（参⑬下804ページ）とされる歌で、俗語訳では「世間ノ衆」に対し「知テ居ラル、デモアラウカ　モシ知ラシヤラズバ」と、ラルルとシャルの両方を使っている。⑲は仮名序の記述で、「萬えうしうとなづけられたりける」を俗語訳では「萬葉集トサ　題号ヲツケラレタワイ」と訳し、敬意の対象を明記していない。ちなみに敬意の対象を明記しないのは「『る・らる』敬語の特色の一」であり、『今昔物語集』には、「『る・らる』敬語が公の政治的動作（任免・賞罰・評定・命令等）に関して用いられることが多い」（参⑪106・107ページ）という。これを参考にすれば、俗語訳でも敬意の対象を明記せず、原文を直訳したことが考えられる。

(b)　物故者

物故者とは、「あるじみまかりにける」と詞書で説明するような、歌の中で偲ばれる対象となっている故人で

ある。ここには「河原のおほいまうち君」「（とものりの）ちち」など、特定できる故人と、単に「あるじ」とのみ記されている故人（中には性別不明者もある）とがある。次に例を示す。

⑳ 河原のおほいまうち君のみまかりての秋かの家のあたりをまかりけるに紅葉の色まだ深くもならざりけるを見てかの家によみていれたりける　近院ノ右のおほいまうちぎみ

うちつけにさびしくもあるかもみぢ葉もぬしなきやどは色なかりけり

○亭主ガナクナラレタレバ　庭ノ紅葉サヘ　ホツコリトシタ色ガナイワイ（386上）

㉑ あるじみまかりにける人の家の梅ノ花をみてよめる　つらゆき

色も香もむかしのこさにゝほへども植けむ人の影ぞ戀しき

○此梅ノ花ヲ見レバ　色モ香モマヘカタノ濃サニカハラズ同シヤウニ　咲テ見ゴトナケレドモ　今年ハウヱタ亭主ガ居ラレヌユヱ此花ヲ見ルニツケテモ　ウエテヒサウシラレタ亭主ノ面影ガサ戀シイ（386下）

㉒ これたかのみこの、ちゝの侍りけむ時によめりけむ哥ども、とこひければかきておくりけるおくによみてかけりける　とものり

ことならば言の葉さへもきえなゝむ見れば涙のたきまさりけり

○我父ハトテモ死ナルヽナラバ　ヨンデオカレタ哥マデモ　ミナイツシヨニ　イツソ消テシマヘバヨイニ（387上）

㉓ たれ見よと花さけるらむ白雲のたつ野とはやくなりにし物を

○此家ノ此花ハタレニ見ヨトテ咲タコトヤラ　亭主ハ死ナレテ　家モアレテ　此庭ハモハヤ今デハ　里遠イ野ノヤウニナツテシマウタ物ヲ　花ガ咲タトテタレガ見ヤウゾ（387下）

⑳から㉓で敬意の対象となっている故人は、紅葉、花、あるいは生前詠んだ歌などによって思い出され、偲ば

れている人達である。ここでの使用を見ると、(ラ)ルルは親しい交わりのあった亡き人に対する敬意表現として、改まった気持ちを込めて使っていると解せる。また(ラ)ルルの対象となる故人は、「⑳亭主ガナクナラレタレバ」「㉑亭主ガ居ラレヌユエ」「㉓亭主ハ死ナレテ」などと、すべて「亭主」と訳している。(サ)セラルルの対象となる⑤藤原の利基の朝臣に対し「君」と訳している点を考慮すると、どうも(ラ)ルルと亭主との間には対応関係があるのかも知れない。なお亭主の中には、㉑のように「『梅』は紅梅であろうし、この『人』はさような面影を偲ばせる女性であろう」(参⑬下606べ)と見られる故人もあり、必ずしも男性だけが対象とはなっていないことが分かる。

以上、(ラ)ルルの上接語を分類の基準とし、さらに生存者と物故者との区別も含め、敬意の対象との関係を検討してきた。結果からいえることは、(ラ)ルルが敬語動詞に下接して用いられる場合、敬意の対象は神または基本的に最高位の立場にある者だけに限定して使われ、敬意の度合いを強める働きをしている。それに対し、一般動詞に下接し、(ラ)ルルが単独で敬意表現の機能を担っている場合、恋人、世間の衆に対しては、親しい間柄における軽い敬意の表れという印象があるが、葛城ノ王や僧正遍昭など、高位の立場にある者に対してとか公の政治的動作に対しては、格式のある相手に対する敬意表現ともなっている。また物故者に対しては、親しい間柄ではあってもやはり故人ということでやや改まった気持ちを込めているとも解せるのである。

此島正年氏は(ラ)ルルの敬意の度合いに関し、「単独の尊敬助動詞『る・らる』は、おもしろいことに、中古以来『軽い敬語』として続いて来ながら、江戸時代を通じても敬意がそれ以上に下らず、江戸語ではむしろ教養の比較的あると見られる階層に多い用語として(略)やや格式ばった感じの表現に用いられた」(参⑪117べ)と指摘されている。ここでの指摘はそのまま『遠鏡』の場合にも該当するように思う。

最後に(ラ)ルルと対象との関係を整理しておく。

(1)　敬語動詞(「思召ス」「御……アソバス」「仰付ケル」「ツカハス」)に下接する用法(10例)

敬意の対象……大原野ノ神、天皇、二條后、法皇

(2) 一般動詞（補助動詞）に下接する用法（14例）

敬意の対象

(a) 生存者……葛城ノ王(1)、僧正遍昭(1)、恋人(4)、世間の衆(1)、公の政治的動作(1)

(b) 物故者……亭主(4)、（とものりの）父(2)

4 （サッ）シャル

（サッ）シャルに関しては既に拙稿（注1）で触れたが、この敬譲の助動詞は、室町時代に派生した最高敬語（サ）セラルルが江戸期に形態変化を起して広く口頭語として使用されるようになったものである。『遠鏡』で最も使用例が多く、38例現れる。活用形は〈表1〉のようである。

〈表1〉　シャル・サッシャルの各活用形と下接語

原形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
シャル	シャラ（ヌ、ズバ） ッシャラ（ウ、ヌ）	シャッ（タ、テ） ッシャリ（ハ） ッシャッ（タ）	シャル（ナイ、ナ）	シャル（ガ、ハ） ッシャル（コト、デ）		ッシャレ
サッシャル			サッシャル（ナヤ）	サッシャル（モノヲ、デ）		サッシャレ

（サッ）シャルを用いる対象としては、神（タナバタ(3)〈1〉、富士の山の神(1)〈1〉）と一般の人物（天皇、法皇を除く）である。一般の人物には、（ラ）ルルの対象となる物故者は現れず、生存者だけである。その内訳は、次のようになる。

恋人⑭〈⑫〉　友人・知人⑭〈⑩〉　その他（世間の衆、侍臣、恋人か友人か不明）⑥〈⑤〉

なおここに示した数値は、（）はシヤル・サッシヤルの延べ語数、〈〉はシヤル・サッシヤルを用いる対象の数を表している。同一の対象に対しては何回シヤル・サッシヤルを使ってもカウントは1とした。

延べ語数、対象とも恋人と友人・知人とに対して使う例がもっとも多く、両者は拮抗している。ところが両者の使用範囲を見ると、恋人の場合は巻全体に分散化して現れるのに対し、友人・知人の場合は専ら巻八離別歌に集中的に現れる傾向を示し、14例中11例にもなっている。以下順次検討していく。

(1)　神

㉔　七日の日の夜よめる　　凡河内ノ躬恒

年ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよの数ぞすくなかりける

○棚機ハ毎年逢ツシヤリハスレドモ　一年ニタツタ一度ヅヽナレバ　逢ツシヤル夜ノ数ハサスクナイコトヂヤワイ（283上）

㉕　きのめのと

ふじのねのならぬ思ひにもえばもえ神だにけたぬむなし煙を

○出来ヌ戀ノ思ヒニム子ノモエルノハ　キツウ苦シイケレドモ　ハテドウモセウコトガナイ　モエルナラモエヨサ　富士ノ山ノ神様サヘエ御消シナサレイデ　ジヤウヂウ思ヒノ煙ニモエサツシヤルモノヲ　人間ハソノハズノコトヂヤ（416上）

㉔はタナバタに対する、㉕は富士の山の神に対する敬意表現である。タナバタは、神に準ずるものとして扱っておく。㉕は神ではあるが、同じ神であっても先述の天照大神や大原野ノ神に対して最高敬語の（サ）セラルルなどを用いたのとは違い、（サッ）シヤルを用いている。なぜここで（サッ）シヤルを使ったのであろうか。（サッ）シヤルも（サ）セラルルと同程度の敬意を示すものとして使用したのであろうか。

この㉕の歌は、竹岡正夫氏の評を見ると、「恋の歌としてはまことに破天荒な詠み方ともいうべくあまりなおどけ方である。到底雅なる和歌の『さま』ではない」（参⑬下1048〜）という厳しい指摘がある。本来神として崇め奉るべき存在であるのに、「情炎が心の中でくすぶり続けているという自分の激しい恋を、こともあろうに『富士の嶺の成らぬ火』という巨大なものに寄せ」て、時代がかって大仰に表現しているからという。このような指摘を見ると、ここでの（サッ）シャルの使用は、神に対する敬意の度合いを強めるというのではなく、むしろ歌自体の品格を考慮して（サッ）シャルの方が選ばれたのではないかと思われる。つまり（サッ）シャルは、（サ）セラルルや（ラ）ルル（敬語動詞が下接）と違い、滑稽感を伴う軽い表現における敬意表現としても用いられるのではないかと考えられる。

(2)　恋人

恋人は、（サッ）シャルを最も多く使う対象である。恋人に対し（ラ）ルルを使う例が4例あったが、（サッ）シャルは14例である。約3倍強の使用頻度となる。恋人に対する敬意表現は（サッ）シャルが一手に引き受けている観さえある。次に例を示す。

㉖　みつにはなすらへうた

君にけさあしたの霜のおきていなば恋しきごとにきえやわたらむ

○オマヘガケサ別レテ　（二）起テイナシヤツタナラ　ワシハ今カラ　恋シウ思フタビゴトニ消ルヤウニ思フテタテルデカナアラウ（248上）

㉗　かへし　　なりひらの朝臣

けふこずは明日は雪とぞふりなまし消ずは有りとも花と見ましや

○貴様ハ桜ハアダニハナイ業平ヲアダナト云ハシヤルガ　ソレヤ大キナチガヒヂヤ　ワシガ今日参ツタレバコソアノ桜ヲ花ヂヤトハ見レ　モシ今日参ラズバ　明日ハモウ雪ニナツテ降テシマウデアラウ　タトヒソノ雪ニナツタノガ消ズニハアツタトテモ　雪ヂヤトコソ見ヤウケレ　モトノ花トハ見ヤウカヤ（265下）

㉘　ふじはらのたゞふさ

人のもとにまかりける夜きり〴〵すのなきけるをきゝてよめる

きり〴〵すいたくなゝきそ秋のよの長き思ひは我ぞまされる

○コレ御亭主貴様ハ心苦ガオホウテイロ〳〵ノ事ヲ思フテ夜ノ長イヲ明シカ子ルトイハシヤルガ　御亭主アノキリ〴〵スト同シヤウニアマリ泣カシヤルナイ　心苦ガ多ウテ秋ノ夜ノ長イノガメイワクナコトハ　貴様ヨリ　拙者ハサナホノコトヂヤワイ（285下）

㉙　おきかぜ

おやのまもりける（ツイテヰル）人のむすめにいとしのびにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひければいそぎかへるとて（キフニヘヤヘカヘルトテ）もをなむぬぎおきていりにける其後もをかへすとてよめる

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかふもくづなりけり

○此袈ヲノコシテオカシヤツタハ　定メテ又逢フマデノ形見ニ見ヨトイフ御心デコソゴザラウガ　コレヲ見レバ　オマヘノ事ガ思ヒダサレテ　涙ガナガレテサ　海ノ浪ニウク藻屑ノヤウニ　涙ニウク袈ヂヤワイノ（368上）

㉚　つらゆき

あひしれりける人のまうできてかへりにける後によみて花にさしてつかはしける

一め見し君もやくるとさくら花けふはまち見てちらばちらなむ

○此間タチヨツトキテ見テイナシヤツタ人ガ　又ゴザルカト今日一日ハマア待テミテ　ソシテゴザラズバチルナラチツタガヨイ　桜花ヨ　大カタ今日ハゴザリサウナ物ヂヤ（267下）

㉛　小野ノ小町

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

○海松メノ無イ浦ヂヤト云コトヲシラズニ　海士ガミルメヲ刈ウト思フテヒタモノ来ルヤウニ　アノ御人ハワシガ身ヲドウモ逢レヌ身ヂヤトハ　知ラシヤラヌカシテ　一夜モカヽサズニ　足ノダルイニ　毎夜〳〵逢

ハウト思フテ見エル　トテモアハレハセヌノニサ（349上）

㉜　よみ人しらず

まてといはゞねてもゆかなむしひてゆく駒の足をれまへのたな橋

○マアシバラクト申スカラニハ　コヨヒハトマツテモインデ下サレカシ　ソレニナンゾヤ　トリイソイデトツカハトイナシヤルハ　サテモ〳〵キコエマセヌ　カウシテフリモギツテイナシヤルアノオ人ノ馬ノ足ヲツマヅカシテコケサシテクレイ　門ノマヘナ溝ノ橋ヨコリヤ（367上）

㉝　わがよはひ君がやちよにとりそへてとゞめておきてば思ひ出にせよ

○ワレラガ此長命ナヨハヒヲ　ソコモトヘ進ゼウホドニ　コレカラソコモトノ八千世ノヨハヒノ上ヘ　此ワレラガ齢モトリソヘテ　ソコモトニトゞメオカレタナラバ　後ニ思ヒダシグサニシテ我ラガ事ヲ思ヒダサツシヤレ（307上）

㉖は仮名序にある「なすらへうた」の例で、恋人である「オマヘ」に対する敬意表現。なおオマヘは、上方語で「男女とも目上の者に向つて用いる」（参⑦41ページ）表現とあり、ここからでは相手の性差を特定できない。㉗は「なりひら」の歌で、相手の女性である「貴様」に対する敬意表現。㉘は「ふじはらのただふさ」の歌で、「この『人』は愛人の女性で」（参⑬上595ページ）とあることから判断すれば、相手の女性である「亭主、貴様」に対する敬意表現といえる。㉙は「おきかぜ」の歌で、相手の女性である「オマヘ」に対する敬意表現である。

㉚は「つらゆき」の歌で、桜を女性と見立て「桜の身になって相手のつれなさを婉曲になじる心情のある」（参⑬上402ページ）歌であるといわれる。従って「見テイナシヤッタ人」である相手の男性に対する敬意表現と見られる。㉛は「小野ノ小町」の歌で、相手の男性である「アノ御人」に対する敬意表現。㉜は「よみ人しらず」の歌で、相手の男性である「アノオ人」に対する敬意表現。㉝は「夫婦などのごく親しい間柄でのことほぎの歌であろう」（参⑬上829ページ）といわれるもので、夫（または妻）である「ソコモト」に対する敬意表現である。

以上、㉗から㉙は相手の女性、㉚から㉜は相手の男性に対する（サッ）シャルの使用例である。ここで相手の女性に対する二人称を見ると、（ラ）ルルの場合は「ソナタ」を使っていたが、ここでは「貴様、オマヘ、君」などを使っており、両者の違いが注意される。

ところで㉜であるが、「この歌はあまり柄がよくないので、評判もよくない。（略）女としては堪えられない侮辱であるが、そういう激しい女の気持ちをわざとおどけて表現している」（参⑬下429ページ）という評がある。『遠鏡』でも宣長は「さてこの歌、俳諧の類也」と評している。このような評を見ると、先述の㉕「富士ノ山ノ神」に対する例と同様、（サッ）シャルとおどけた表現との対応関係を考えさせられる。

(3)　友人・知人

友人・知人は男性同士の贈答歌での使用を一括したもので、特に巻八離別歌での使用が圧倒的に多いことは先述した。離別歌では（サッ）シャルを使う対象は、すべて旅立つ友人・知人である（㉞参照）。久曽神昇氏の分類を参考にすれば（参⑬上861ページ）、（サッ）シャルの現れる歌はすべて「見送る人」の「一般の餞別」に含まれるものばかりである。これは「男女の餞別」とは違う、男同士の交友関係を詠ったものである。

なお巻八の他に、「在原しげはる」の歌に対する「返し」として詠われた壬生ノ忠岑の歌（㉟）、「近院ノおほいまうち君」が「大納言ふじはらのくにつね」の官途昇進を祝って贈った歌（㊱）もここに含めた。次に例を示す。

㉞　人のうまのはなむけにてよめる　　きのつらゆき

をしむから恋しきものをしら雲のたちなむ後は何ごゝちせむ

㉟　○ナゴリヲシウ思ヘバ　マダタヽツシヤラヌウチカラハヤ此ヤウニ恋シイ物ヲ〔三〕立テイカシヤツタアトデハ　ドノヤウナコヽチガスルデアラウ（311下）　　壬生ノ忠岑

かへし

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

○貴様ハ袖ヘ入レウトシタナラヂキニキエルデアラウカト云ハシヤルガ　デモ袖ヲオイテ外ニ玉ヲツヽマウカ　袖ヨリ外ニ玉ヲツツマウ物ハナイハサテ　スレヤ貴様ノ袖ヘツヽンデ　コレガサソレデゴザルト云テワシガ袖ヘウツサツシヤレ　ワシモ見ヤウワサ　打聞よろし　餘材わろし（322上）

㊱大納言ふじはらのくにつぬの朝臣宰相より中納言になりける時にそめぬうへのきぬのあやをおくるとてよめる

近院ノ右のおほいまうちぎみ

いろなしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてしものを

○コレハ白ノ綾ナレバ　ナンニモ色ガナウテ　興ノナイヤウニ　思ハツシヤルデカナゴザラウ　吾ハトウカラ貴様ヘキツウ深イ心ザシデ濃ウ染テオイタ綾デゴザルモノヲ（390下）

㉞㉟は対等の相手に対する敬意の表出と見られるが、㊱は、藤原国経が従三位権中納言に昇進したことを祝って、袍の料にすべき白綾を贈った時の歌で、「贈り物を材料に日頃の親密感を表白したものか、あるいは将来の懇意を願ったものであろう」（参⑬下649ページ）との評がある。これによれば対等またはそれ以上の相手に対する敬意表現と見られる。

なお友人・知人に対してはすべて（サッ）シャルを敬意表現として用いており、対応する二人称代名詞は、すべて貴様（または表示なし）で統一している点が指摘できる。先述したように「貴様」は相手の女性に対しても使っているが、男性が男性に対して使う方が圧倒的に多い。ちなみに『遠鏡』に現れる「貴様」は33例、このうち（サッ）シャルと対応するのが12例、約3分の1強の比率となっている。

このように（サッ）シャルと対応する貴様であるが、ここで「貴様」の敬意の度合いを見ておこう。まず山崎久之氏によると、『遠鏡』の刊行された寛政期頃には、「貴様」は五段階中の第二段階（普通敬語）から第三段階（対等又はそれ以下）に下降する動揺期にあたっていると見ておられる。（参③789ページ）。しかもこの語は「糸の切

れたタコのように、対応語と分離して急速に転落して行ったのである。」（参③790ページ）と述べ、時代が下るに従って敬意の度合いが低下していくと指摘しておられる。ところが辻村敏樹氏によると、「寛政の頃には案外敬意ある語としての用例が多い」（参⑧191ページ）と指摘され、さらに『遠鏡』について「（貴様の）用例が非常に多い。これも『貴様』がかなり高く買われていた証とすることができる。」（参⑧192ページ）と述べておられる。

『遠鏡』に現れる貴様の場合、山崎説の指摘するような普通敬語以下に扱われていると見ることには無理がある。ここでは恋人である女性に対し、また男性同士の贈答歌で使われており、対等あるいはそれ以上、と見られる相手に対する敬意表出として機能していることが読み取れる。従ってこのような「貴様」と対応する（サッ）シャルの敬意の度合いを考えれば、対等またはそれ以上に対する敬譲の助動詞であるということが出来るのではないか。

(4)　その他（世間の衆　侍臣、恋人または友人・知人）

ここには㊲女中タチ、㊳世間の衆など、不特定の相手に対して使っている場合と、㊴「みかど」のお側に「さふらふ人々」、㊵東歌にある御侍衆、そして㊶友人・知人か恋人か判然としない例を一括して扱うことにした。次に例を示す。

㊲　女共の見てわらひければよめる　　けんげいほうし

かたちこそみやまがくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ

○女中タチメツタニワシヲ笑ハシヤルガ　此通リ形コソ深山ノオクノ朽木ノヤウナレワシモ　花ニセウナラ心ハ花ニモナラウワサ（392上）

㊳　　ふるのいまみち

しりにけむきゝてもいとへよの中は浪のさわぎに風ぞしくめる

○コレ世間ノ衆　知テ居ラル、デモアラウガ　モシ知ラシヤラズバ　今ワシガ云テキカスヲ　聞テナリトモ此世ヲバ早ウステサツシヤレ　テウド風ガ吹テ浪ノサワガシウシキリニウチヨセテクル荒イ海ベノヤウナ世

ノ中デ　アヽドウモ落付カヌアンドノナラヌヤウスヂヤゾヤ（402上）

㊴ いにしへのよゝのみかど春の花のあした　秋の月の夜ごとにさふらふ人々をめしてことにつけつゝ哥をたてまつらしめ給ふ

○昔ハ御代々ノ天子様ガ　春ノ花ノ時分ヤ　秋ノ月夜ナド云時ニハ　イツデモ　ツメテ居サツシヤル衆ヲ御前ヘメシテ　ナンゾレカゾレ事ニツケテハ　哥ヲ上ルヤウニ仰付ラレタ（250上）

㊵ みさふらひ御かさとまうせ宮城野の木の下露は雨にまされり

○御侍衆　ソレ御笠ト申シ上ケサツシヤレ　此宮城野ノ木カラオチル露ハ　ケシカラヌモノデ　雨ヨリモキツウヌレマスゾェ（425上）

㊶ みふのたゞみね

住吉とあまはつぐともながゐすな人わすれ草おふといふなり

○住吉ヘゴザツテモシソコノ海士ハ住ヨイ所デゴザルト云テキカストモ　必ス長居バシサツシヤルナヤ　住吉ハ在所ノ人ヲ忘レルト云ワスレ草ガハエテアルト云コトヂヤホドニ（397下）

㊲は、「やはり珍しい好色的戯咲歌であって」（参⑬下673ペ）という評があり、先述した㉕㉜の歌と同様、おどけ、戯れ等に一括できる歌といえよう。この3種の歌での（サッ）シャルの使用を見ると、（ラ）ルルが「やや格式ばった感じの表現に用いられた」ことと対照をなしており、（サッ）シャルの方は肩のこらない対象に対する敬意表現という側面をもっていると言えるようである。

㊳は先述したようにしたように、「コレ世間ノ衆　知テ居ラルヽデモアラウガ　モシ知ラシヤラズバ」の例が示すように、（ラ）ルルルと（サッ）シャルが共存している。㊴は仮名序の記述で、㊵は東歌であるが、いずれも侍臣を対象に（サッ）シャルを用いている。㊶は相手が女性か男性か特定できないが、男性から女性（または男性）に対する敬意表現である。

以上、『遠鏡』に現れる（サッ）シャルについてまとめておく。

1、敬譲の助動詞の中で使用頻度が最も高い。

2、神（タナバタ、富士ノ山ノ神）をはじめ恋人、友人・知人、侍臣、不特定多数などを対象にした敬意表現で、使用範囲は広い。

3、恋人、友人・知人に対する頻度の高さは、（サッ）シャルが対等またはそれ以上の人物に対する敬意表現となっていることを意味している。

4、3に関係するが、男性から相手の女性に、男性から男性に対する敬意表現としての使用が多いため、男性語としての性格が強い。

5、ルル・ラルルが一般動詞に下接して用いられる場合、敬意の対象の中に社会的地位の比較的高い人物（葛城ノ王、僧正遍昭、藤原のよるか等）とか、故人なども含み、改まった表現に用いられるという傾向があるのに対しシャル・サッシャルの方はどちらかと言うと、社会的地位に関して記述のない恋人とか不特定多数までも対象とし、さらには戯れたおどけた歌で使用するなど、日常的でくだけた場面での敬意表現という傾向がある。

5　まとめ

『遠鏡』に現れる敬譲の助動詞を取り上げ三者三様の使用例を検討してきた。結果として言えることは、最高敬語の（サ）セラルルは、使用対象が基本的に最上位者に限定され、頻度も低く、形式化した使用例となっている。それに対し（ラ）ルルと（サッ）シャルはかなり広く用いられており、特に（サッ）シャルは普通の敬意表現として勢力を有していることがわかる。両者は敬意の度合いにおいて共通点と相違点がある。両者とも恋人や世間の衆に対する軽い敬意表現である点は共通する。もっとも恋人に対しては（ラ）ルルより（サッ）シャルの方が使用例は多くなっている。相違点としては、（ラ）ルルの方は葛城ノ王や公の政治的動作、あるいは故人に対して

使用するなど改まった表現にも用いる傾向があるのに対し、(サッ)シャルの方は友人・知人での使用例が多く男性語としての性格をもつ一方、戯れ歌、俳諧歌の類で使用するなどくだけた場面での使用も認められる。

ところで(ラ)ルルは、先述したように「江戸語ではむしろ教養の比較的あると見られる階層に多い用語として(略)やや格式ばった感じの表現に用いられた」とある。また(サッ)シャルは、『遠鏡』の刊行された寛政期になると、町人言葉としてはかなり勢力が衰えて、次第に使われなくなっていったといわれるが、武士言葉や「町人でも、家主や庄屋のようなれっきとした町人では、(略)対称の動作にも使用している。」(参③594ベ)という。このことからみると、『遠鏡』での(ラ)ルルと(サッ)シャルの使い分けと使用頻度の高さは、それが当時の武士や「町人でも、家主や庄屋のようなれっきとした町人」の用いる日常普通の敬譲の助動詞として健在であり、俗言として採用する資格のある口頭語と看做されたことによるのではないかと思う。

ちなみに宣長は松坂の商家に生まれ、医を業とした国学者である。上級武士との交友もあり、この『遠鏡』は、弟子の一人、尾張の重臣横井千秋に請われて成った俗語訳であることは冒頭に述べた。従って俗語訳の中での(ラ)ルルや(サッ)シャルの使用は、おそらくそれが本居宣長の日常語として機能していたことと関係があるのではないかと思われる。この点に関してはさらに今後検討していきたい。

(注1)　塩澤　和子　近刊予定「本居宣長『古今集遠鏡』における敬譲の助動詞――「しやる・さしやる」をめぐって」『近代語研究』第九集　武蔵野書院

〈参考文献〉

① 本居　宣長　1927・1(増訂再版)『増補本居宣長全集　第七巻』　吉川弘文館
② 湯澤幸吉郎　1954・4『増訂江戸言葉の研究』明治書院
③ 山崎　久之　1963・4『国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院
④ 前田　勇編　1964・4『近世上方語辞典』　東京堂出版

⑤ 森野　宗明　1968・12「敬語の分類」『月刊　文法』明治書院
⑥ 松村　明編　1969・4『古典語現代語　助詞助動詞詳説』学燈社
⑦ 湯澤幸吉郎　1970・2『徳川時代言語の研究』風間書房
⑧ 辻村　敏樹　1971・6『敬語の史的研究』東京堂出版
⑨ 松村　明編　1971・10『日本文法大辞典』明治書院
⑩ 中村　幸彦　1971・12「近世語彙の資料について」『国語学』87　武蔵野書院
⑪ 此島　正年　1973・10『国語助動詞の研究』桜楓社
⑫ 田中　章夫　1973・11「近世敬語の概観」『敬語講座4　近世の敬語』明治書院
⑬ 竹岡　正夫　1976・11『古今和歌集全評釈（上）（下）』右文書院
⑭ 林　巨樹　1980・3「江戸語中期の国語について―古今集遠鏡訳文の助動詞研究」『青山語文』10　青山学院大学日本文学会
⑮ 永田　信也　1985・3「『古今集遠鏡』と『古今和歌集鄙言』の人称代名詞―俗言解における訳出の異同から」『国語国文研究』73　北海道大学国語国文学会
⑯ 島田　勇雄　1986・5「近世語の世界」『日本語学』5―5　明治書院